

中国・江西省 の追儺行事

廣 田 律 子

一、はじめに

中国では「追儺」のことを「儺」と称し、除災と招福を目的とする信仰儀礼と民俗芸能が切り離せない関係にあり、両者が混在した習俗と言える。芸能に力点を置いて、「儺戯」とか「儺舞」とか称されるのも、このためである。

中国国内では、西藏から黄土高原、雲貴高原、揚子江の中・下流域と全国的に分布しており、漢民族はもとより、チワン族、ミャオ族、プイ族、トン族、イ族、トゥチャ族、コーラオ族、ムーラオ族、チベット族、メンパ族、蒙古族などに伝承されている。中には、『周礼』、『礼記』などの文献に散見できる古代礼制から隋唐に至る季冬大儺の制が、民間に受け入れられ育まれてきたものもある。中でも、重要だと考えられる事例が今回調査対象とする石郵村の追儺行事である。

「鬼は外、福は内」——。毎年二月に行われる節分の起源を求めて、中国南東部の江西省を訪れた。江西省の

北部は揚子江が流れ、四方を安徽省、湖北省、広東省、福建省、浙江省に囲まれている。焼き物の産地として名高い景德鎮は、この江西省にある。省都の南昌は、省の中央北寄りに位置する。南昌までは、上海から空路一時間半ほどである。南昌から南東に車で約四時間程、役二百^{km}で南豊県県城に至る。そこからさらに南西に約二十^{km}行くと、今回の調査地、古い形の追儺が行われている石郵村に至る。

今回の報告は一九九三年の旧正月と夏に行った調査に基づくものである。

二、石郵村概要

石郵村は、人口の五〇％以上を占める呉氏を大姓とする漢族の村である。呉姓のほかには、劉、羅、胡、蕭、葉、孟などの十一の姓がある。戸数二百四十六戸、人口一千三十七人（一九九三年現在）。清代光緒十八年に編集された『石郵呉氏重修族譜』が現在に伝えられている。

その記載によれば、現在の呉氏の祖である呉予が、五代の末に四川から江西撫州に入つて、さらに南下し南豊県に定着した。約二百年後の南宋代に呉十が石郵に村を拓いたという。

族譜の中に『石郵郷讎記』が採録されているが、これによると、石郵村の追讎は、明代宣徳年間に呉太尹公が赴任先の広東潮州から持ち込み、始めたといわれる。

石郵村は川沿いの丘陵地に形成された集落で、稲作（二期作）と蜜柑栽培、そして近頃では換金作物として蓮の栽培を営む。一九九一年で、三十二・九畝の水田から五百九十九・四畝の米を産し、二十三・一畝の蜜柑畑から三百畝の蜜柑を産した。九二年で、一人当たりの平均収入は七百八十五元だという。

三、行事の組織

石郵村の追讎行事に関する組織、祭祀の中心となる廟、祭りの構成について報告する。

追讎行事には維持管理する組織として、呉姓の人々で構成される「頭人会」がある。更に、もう一つは実際に祭りの司祭、演技を担当する呉姓以外の雑姓の者から構成された「讎班」の組織がある。

頭人会の構成員は、七八年を契機に変動が見られる。歴史的経緯を合わせて説明すると、石郵村は呉氏十六代

の清臣公と良臣公の兄弟が二つに分かれて、それぞれ東位詞堂と西位詞堂に宗廟を分けた。今も村は東巷と西巷とにはっきり分かれ、それぞれ外畹、里畹と称されている。昔は、外畹は百姓になり、里畹は官吏を務めたという。これを反映して、頭人の構成員も外畹、里回各十二人から成っていた。外畹は頭人を順番に回り持ちしても良かったが、里畹では世襲していた。以前、この頭人組織は追讎の祭りだけでなく、村の自治に権威を持ち、様々な役割を果たしていたと想像される。

六五年から文革によって追讎行事がおこなわれなくなり、面は三つを残して壊されるなどした。七八年十二月の相談により、頭人に村長をはじめとして行政に関わる、いわゆる幹部や裕福な家の者八人を加えて、三十二人で頭人会を組織し、七九年旧正月から追讎行事を復活したいきさつがある。頭人会の役割も以前と変化して、追讎行事に関わることのみとなった。

具体的に仕事の内容は、追讎行事や面の補修などの祭りに関係して必要な資金集め、用品の準備、讎神を祭る廟とその所有物の管理、讎班の構成員の任命・罷免、追讎行事の実行運営などが挙げられる。

追讎の演者の讎班は、男性八人と決められており、加した順に大伯、二伯、三伯、四伯、五伯、六伯、七伯、八伯、と称される。基本的には石郵村の呉姓以外の姓の

者がなる。

九三年八月現在の構成員は次の通り。

大伯：羅会友 57歳 石郵村出身。五九年加入、九三年

年黄佐仕大伯の死亡により大伯になる。共産

黨員。

二伯：吳衆家 62歳 石郵村出身。五九年加入。共産

黨員。

三伯：羅会武 54歳 石郵村出身。五九年加入。羅会

友の従兄弟にあたる。大伯、二伯に代わって

祭祀の司祭を務める。

四伯：彭金孫 54歳 塘子窠村出身。父は大伯を務め

た彭潤仔（五八年没）。八一年加入。

五伯：葉根明 26歳 石郵村出身。羅会友の甥。八一

年加入後、三年で演じられなくなり一時退く

が、八九年に再加入。

六伯：唐賢仔 25歳 住耀里村出身で妻は石郵村出身。

八一年加入。

七伯：聶侑富 28歳 柏蒼木江下村出身。八九年加入。

八伯：彭春根 20歳 塘子窠村出身。九二年加入。

雛班には様々な厳しい決まりがある。例えば、食事の着席の順もはっきり決まっております。大伯の前に二伯、大伯の右に三伯、その隣に四伯、大伯の左に八伯、その隣に五伯、七伯、六伯と座る。食事の作法では、酒を飲む時

に右手中指を酒に浸し、まず左耳のところで弾く。次に右耳のところで弾き、「謝師」という。また出された食事でも、鶏の頭や焼き魚は手をつけてはいけない。おかずは「年々有餘」ということで、必ず残さなければ失礼になる。豚肉は二かけ、野菜は全部食べてしまっても良い。箸の上げ下げは最初に大伯から行う。また、演技している最中にとりものを落としてはいけない。

また、各家で頂いたものの分配に当たっては、菓子などの供物を分けるのは七伯、八伯、お布施を数えたり分配したりするのは三伯、四伯、線香や煙草を数えるのは大伯、二伯というように分担する。演技や唱歌などなどは、すべて先輩から後輩へと口頭で教えられ、農閑期などに練習を行う。特に八伯は、荷物を担いだり、演技やしきたりを覚えたりと大変なため、続かずに頭人によって罷免される若者も時々出るといふ。

そのほか、「ろうそく会」「爆竹会」「炮会」「灯会」と称して、追雛行事に協力する人々がいる。ろうそく会は、太さ十五センチほど、高さは一メートルを超える大ろうそくに「雛為古禮本流長、神遵無私逐疫良」「太尹相傳今已久、子孫万億奉声香」などと対に文句を書いて準備する。爆竹会は、爆竹を鳴らす。炮会は、火薬と筒を準備して、家々で打ち上げ火花を上げる。灯会は、半年前から竹を乾かし、当日は追雛の列の先頭に立って、松明を点す。

九二年の追儺行事では、打ち上げ花火に火薬十五、十畝分の爆竹三十六個、特大ろうそく十二対などを支出したという。祭りの経費については、解放前の儺神廟は三十九・六、程の田を所有し、人に任せて百三十、程の米を收穫していたので、それを充当していた。また、竹山も所有していた。現在は、儺班への個人的なお布施や村民らの募金に頼って運営されている。

廟内にはられた赤紙に「三溪郷石郵村開光清醮集福吉祥各新信士喜助款如下」とあり、村民一人につき一元ずつ金を出し、合計一千三十四元集まったと記載されている。この開光は、追儺の祭りで使う面を塗り替え補修をほどこす三年に一度の行事であり、追儺行事の関連行事と言える。祭りを存続するために村全体で労力、金銭両面で協力していると言えよう。

四、儺神廟

現在は村の南西にある追儺の神を祭る儺神廟が祭りの中心となる。以前は村の北側の丘にあり、現在は老儺神殿と称される。儺班はこの老儺神殿に「起儺」「搜儺」の際に必ず礼拝しに行く。現在の廟は、清代乾隆四十六年（一七八一年）に建てられた。南面し、以前は廟の前に舞台があった。廟は一九八五年に火災に遇ったが、二万元に達する人々の寄進により修復された。

廟の正面には儺神太子の高さ一畝ほどの神像が座し、その後ろに「儺仔」と称される持ち運びのできる儺神人形の座を中心に、左右二段に雷公、鍾馗、儺婆、儺公、関公、開山、小神、紙銭、哪叱、楊戩、大神そして近年加えられた如来の像が置かれている。哪叱は一郎、楊戩は二郎とも称される。また、儺神太子の向かって右手には土地神の像が祭られ、左手にはこの村で追儺を始めた呉太尹公が祭られている。

廟内の神像の配置は図に示したので参照されたい。

五、祭りの構成

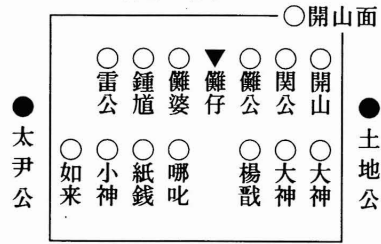
（一）起儺

祭りは「起儺」、「跳儺」、「搜儺」、「圓儺」の四つの段階を経て進められる。それぞれの内容を以下に解説しよう。

まず起儺は、旧暦正月一日の前日と当日に行われる。晦日に儺班達は儺神廟に参拝し、儺神太子とその左右の呉太尹公と土地神に線香を点す。廟の扉外には爆竹をかけて鳴らす。紙銭を燃やす。廟の扉を閉じて儺班の他は一人も入れない。面を廟の祭壇正面の天井裏にある竹箱から取り出す。道具類も下ろす。

箱から取り出された面は、茶の葉を湿らせたもので拭いた後、祭壇正面上部に掛ける。順番は上段左から、雷

儺神廟内の神像の配置：

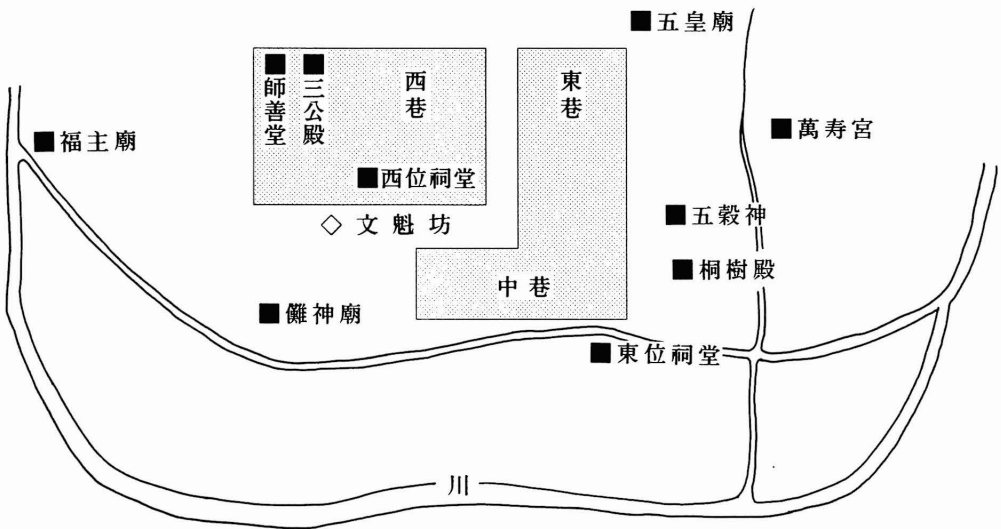


●儺神太子像

村の地図：



■牛大王殿



公、鍾馗、雛婆、雛公、関公、開山、開山と並べ、下段は左から小神、紙銭、哪叱、楊戩、大神、大神と並べる。この順は後ろに並べられた神像に一致する。開山面と大神面が二面ずつあるのは、廟の守りとする開山面と面を入れる箱の守りとする大神面があるからである。雛神太子の化身である雛仔の人形は、雛神太子の後ろに並べられたそれぞれの神像の中央に小さな椅子を置いて座らせる（放聖像）。次に雛神太子の衣を替える。

一日は、まず神まぎを行う。雛班は三列になり、最前列には左から三伯、二伯、大伯、次の列には六伯、五伯、四伯、三列目は六伯の後ろに八伯が銅鑼を持ち、四伯の後ろに七伯が太鼓を持って並ぶ。胸のところで手を組み三回礼をする。唱えごとに通じている三伯が二伯に代わって、「雛神太子鳴詞」を唱える。唱えごとは、雛神太子の出自を明らかにし、人々の願いを伝える内容である。

次に對になっている竹の根で作られた卜具で、神の意志を尋ねる（判筭）。この時の唱えごとの内容は、当日神をお連れする場所を述べ、人々はきつと歓迎しますからどうぞ出発しましょうというものである。ここで神が同意した場合、陰と陽つまり占具の凹面と、凸面が揃う。しかし、凹面のみ、または凸面のみ出た場合は、「今朝はまだ遅くありませんから、どうぞお願いします」と唱えて、また占いをする。陰陽が出たら「神が馬に乗られ

る（上馬）」つまり出発ということになる。

はじめに村の東西南北に祭られる各廟と宗廟に参る。六伯、七伯は線香、ろうそくを持ち、先にそれぞれの廟に点す。掛けてあった面は、廟の守りとして開山面一面を残して、すべて箱に収める。大伯は太鼓、二伯は銅鑼、三伯は雛仔、八伯は面の入った箱を持ち、四伯と五伯は何も持たずに各廟の参拝に出る。水路沿いを西に向かって行き、福主殿に参拝する。三回頭を下げ礼拝を行う。次に蜜柑畑を北の方角に進み、村の北側の丘にある牛大王殿、騎螺太子殿に向かって、少し離れた道端から礼拝する。この時の礼拝の方法は、左足を右足の後ろに付け、両足を曲げて礼をする。村の北側に位置する師善堂、そのすぐ東側の三公殿、そして北側の丘にある老雛神殿、村の外側を回り、桐樹殿、そして東位祠堂を順次参拝する。その後、村の南側を西に進み、さらに村の中央を北に向かって、孝行坊、文魁坊の跡にそれぞれ礼拝しながら進み、西位祠堂に至り、礼を行う。

（2）跳雛

二段目の跳雛は、一日から一六日午後まで行われる。

一日から九日は石郵村、十日から十六日まで是他村で行う。演目は、『開山』、『紙銭』、『雷公』、『雛公雛婆』、『酔酒・酒壺仔』、『跳橈』、『雙伯郎』、『関

公祭刀」が演じられる。

一日には西位祠堂と、その門前にある長寿を全うした死者の棺おけを置くための花びら形に床が堀り込まれた「花寝」と称される場所で上演された後、東位祠堂とその前の「花寝」で上演され、続いて石郵村で雛を始めたとされる呉太尹公の家で上演される。この家も今は太尹公の後裔が絶えたため、曹家と呉家の二家が住む。一日に上演されるのは以上の五か所に限られる。

二日から九日まで石郵村の各家々で順番に上演される。この順路については地図を参照されたい。^{注1} 毎日上演前に雛班達は雛神廟で拝み、神の意志を占う。

家々では入口正面奥の庁堂にある神棚の前に祭壇をしつらえ、ろうそくを立て、菓子などの供物を供え、線香を用意し、赤い紙にお礼として四十円から八十円を包む。

家の主人は三本線香を点し、雛仔を迎え、家の祭壇中央に置き、ろうそくを点す。家の人々は線香を三本ずつ持ち、戸口で雛班を迎える。雛班達は、戸口のところで十六句のことはぎを唱え、その四句ごとに主人は爆竹を鳴らし、人々は「好啊（良いです）」と答える。その後家に入り、祭壇前で八つの演目の中から演ずる。家によって演目が違っているが、はじめの開山は清めの意味があるので、必ず演じられる。武器などのとりものを振り上げる激しい動きが多いのだが、上演中は決してとりもの

を落したりしてはいけない。

上演後、主人は菓子と線香、紙銭、礼金を大伯に贈る。大伯は菓子は半分受取り、残りは返す。この時、大伯は「人が栄え、財を成すように」と祝言を述べる。主人は「神様のお陰です」と答える。特に子授かりを求める家の場合は、夫婦の床に菓子の供物を置き、お礼とろうそくを準備し、雛仔を迎え、床に座らせ、その左右に雛婆・雛公の面ととりものを置く。雛婆を演じる人は床の左に、雛公を演じる人は床の右に立ち、妻と夫もその後ろに、姑と舅も分かれて立つ。雛班が「男は百の福を得、女は千の良いことを納める。……跡継ぎを求める者、早く長生きの子宝を得、人々の上に立つように」と唱えごとをし、三回礼をして面を持ち、舅が雛仔を持ち、爆竹を鳴らして寝室を出る。祭壇に雛仔を戻し、再び雛婆雛公を演じる。主人はお礼を贈り、大伯は答えて、「早く長寿の子宝に恵まれるように」と言い、礼金を受け取り、供物の菓子は二つを頂き残りを返す。

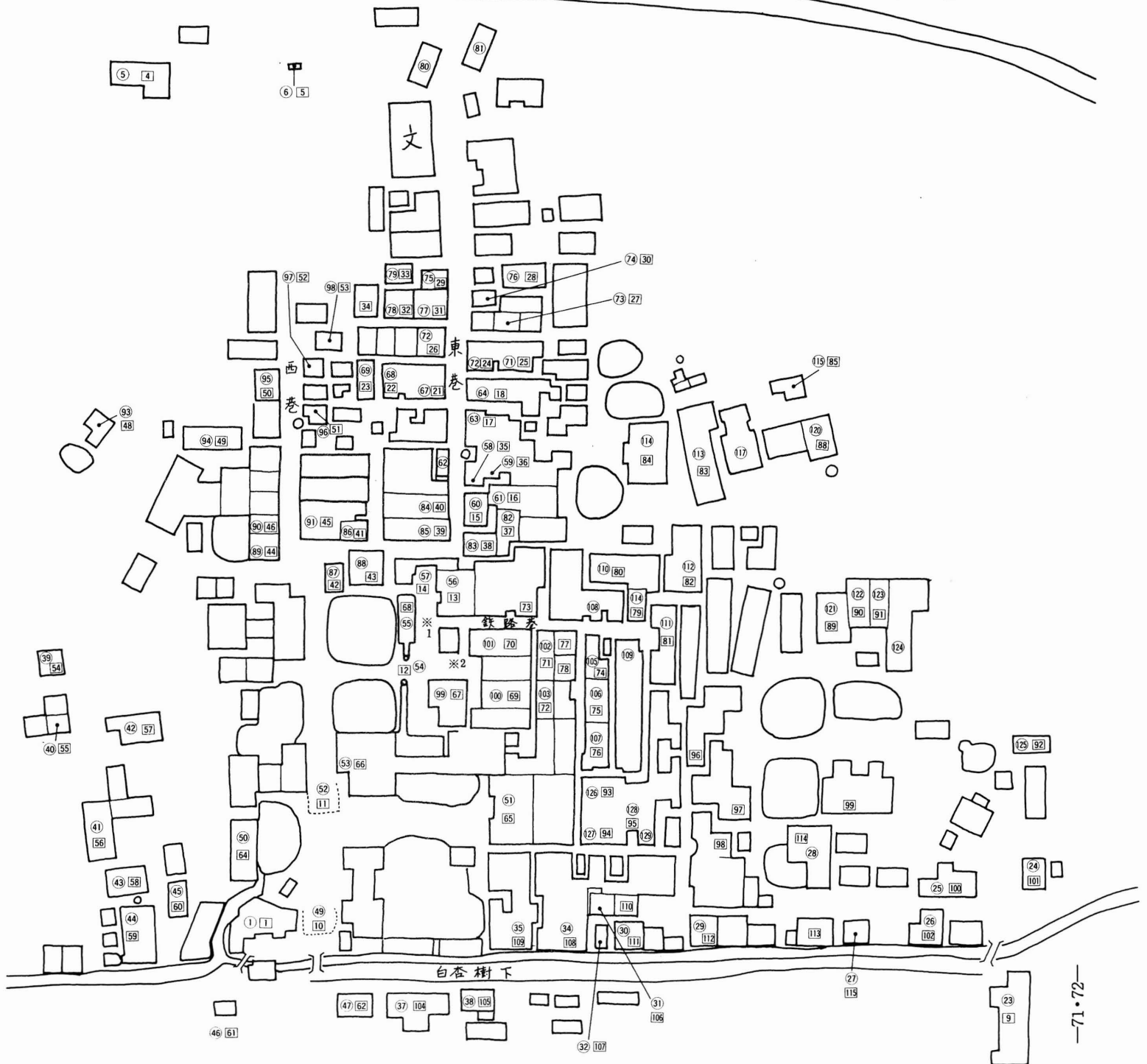
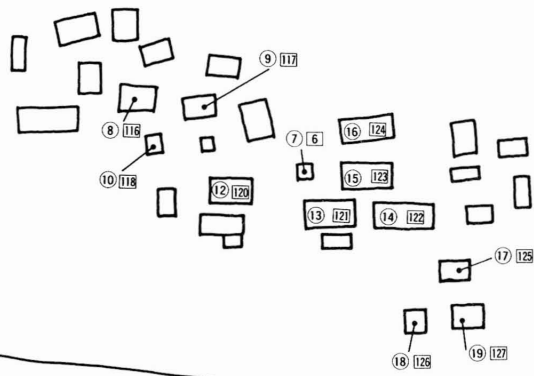
一日ごとに、上演後雛神廟に戻り、「馬から降りる（下馬）」と称して神降ろしを行う。その際、「どこどこに行き、人々は喜んで迎えていました。どうぞ馬から下りてください」と唱える。箱を守る大神の面一つを残し、全ての面を取り出し、祭壇上部に掛ける。七伯は、とりものなどの道具を翌日の上演一番目の家に持って行っ

村内“搜儺”“跳儺”順路図

- | | | | |
|----|-------|----|----|
| ① | 儺師 | 神堂 | 廟 |
| ⑤ | 三老 | 善公 | 殿 |
| ⑥ | 東位 | 儺公 | 殿 |
| ⑦ | 世沐 | 神祠 | 堂 |
| ②③ | 孝烈 | 思行 | 光坊 |
| ⑧⑩ | 文魁 | 女魁 | 坊 |
| ⑪ | 西位 | 祠 | 坊 |
| ⑫ | 登誰 | 誰 | 堂坊 |
| ⑬ | ※1. 世 | 科 | 坊 |
| ⑭ | ※2. 紀 | 元 | 坊 |

○…16日 搜儺

□…1日～9日 跳儺



ておく。

二日目と八日目は、慣習に従い雛神廟に戻らず、個人の家で下馬を行う。二日目は西巷の呉光旺の家、八日目は東巷の曹錦容の家と決まっている。祭壇に上から一列目に雷公、雛婆・雛公、開山、二列目に鍾馗、哪叱、楊戩、関公、三列目に小神、紙銭、大神の面を置く。供物として鶏、魚、豚を供える。その番、主人をはじめ家の人々は「神に付き添う」と言つて、明かりをつけ、麻雀などをして夜を明かす。

毎日、下馬を終えると、雛班は供物や礼金の分配を行う。分配に際して、四伯は礼金を、五伯と六伯は供物の菓子に分ける。礼金等割り切れぬ時は、翌日に回して四伯が保管する。分け前は、まず大伯から取る。一日から十六日に得た供物の菓子と一日から九日の石郵村で得た礼金は八人で分配する。十日から十六日に他村で得た礼金は、雛神廟に二千元、頭人へのもてなしとして二千元、そして雛班の慰労会のために支出するため四伯が保管する。九三年に雛班が得た臨時収入は一人約三千三百円程である。

十日から十六日は他の村に赴き上演する。石郵村から見て上流と下流の村に分け、石郵村からの距離、そして村の戸数の大小によつて、いくつかの村でグループを作り、上流の上流と下流の下流から一日で回れるように、

一つずつグループを選ぶ。そして、このグループで良いかどうか、神に意志を尋ねる。

もし神が同意しない場合、別のグループを選んで占う。神の意志によるのであるから、遠い所で戸数が多いグループが複数組み合わされることもあり、石郵村に帰り着くのが真夜中になることもあるという。

他村の村名と石郵村からの距離・上演にかかる時間は次の通り。

上路：荷堰上、荷嶺、河背、朗石下（一・五⁺、上演に

一日必要）

柏蒼（二・五⁺、上演に一日必要）

阮家、曹家、木江下、茶山下（四⁺、上演に一日必要）

楊梅寨、里江、東辺石（五⁺、上演に一日必要）

黄家山（七・五⁺、上演に半日必要）

下路：錢舍（二・五⁺、上演に一日必要）

石兼（三・五⁺、上演に一日必要）

里山（三・五⁺、上演に一日必要）

耀星（五⁺、上演に一日必要）

塘坊（七⁺、上演に一日必要）

前山、下山（七⁺、上演に一日半必要）

茲田、港下、楼下（七・五⁺、上演に一日半必要）

青塘、龍源、胡子堰、塘子窠（一・五―二・五⁺、

上演に一日必要)

ただし、十六日は搜雛の儀礼があるため、日中は青塘グループに行くことが決まっている。

因みに、九三年に他村で行われた跳雛の戸数は次の通りである。

▽十日 河背二十六戸 ▽十一日 柏蒼二十八戸 ▽十二日 茶山下・木江下・阮家三十四戸 ▽十三・十四日 餞舎四十四戸 ▽十五日 里山十四戸 ▽十六日 塘子窠・龍源十六戸。

(3) 搜雛

第三段の搜雛は、十六日夜から翌未明まで夜通しで行われる鬼やらいの儀礼である。

これに先立つ十五日夜、予行演習をして、頭人などの敵しいチェックを受ける。

最初にろうそくを点ける。「雛神太子鳴詞」を唱え、搜雛を行う順路を唱え、最後に「皆が神様を喜んで待っています。馬に乗ってください」と結ぶ。祭壇に置かれていた酒壺を取り、大伯、二伯……八伯と次々に注ぎ、一口ずつ飲む。神にも捧げる。それぞれことほぎの文句を言い、鍾馗、開山、大神の三面を取り、酒を吹き付けて、それぞれ四伯、五伯、七伯が被る。

そして、廟の鬼やらいを行う。打ち上げ花火が物凄

音をたてる。止めどなく爆竹が轟く。廟の門口に鍾馗が現れ、三回飛び跳ねたかと思うと、物凄い勢いで廟内に駆け込んで来る。そして祭壇左手前に立ち、右手の親指、中指、薬指をくっつけて印を結び、精一杯門口に向かって振る。次に開山が現れ、やはり三回跳び、走り込んで来る。手には鎖を持ち、その一方の端を鍾馗に持たせ、祭壇右側に立ちやはり印を結んだ右手を門口に向かって精一杯振る。続いて大神が三回門口で跳んだ後走り込んで、鎖を跳び越え、祭壇前で右手、左手と挙げ、上に下に頭を動かして、側転をする。最後に三神は祝言を述べた後、外に走り出る。

竹を乾かして作った三坪程の松明を持つ人を先頭に、雛班達は水路沿いを走って、まず福主殿に詣で、次に牛大王殿、騎螺太子殿を遠拝し、師善堂、三公殿、老雛神殿に詣でた後、この付近の北側の丘にある家々の鬼やらいを行い、萬寿宮、桐樹殿に詣で、東位祠堂で鬼やらいをする。その後、西に向かって、家々の鬼やらいを行い、孝行坊をはじめとする坊で礼拝しながら、雛神廟脇の道を北に向かって家々を回り、西位祠堂から東巷を経て西巷へ、さらに中巷へと村の百八十九軒一軒一軒の祭壇を回って、鬼やらいを行う。詳しい順路は地図を参照されたい。

家々では、ドンドンという太鼓とピューという口笛、

そして打ち上げ花火の音で、鬼やらいが我が家に近付くのを感じ取る。祭壇にろうそくが点され、供物として炊いた御飯を碗にてんこ盛りにし、その上に小魚の焼いたもの、豚肉の煮たものが重ねられ、赤い紙を載せる。紙銭と線香を置き、又湯飲みに水を入れておく。

松明を先頭に、お礼の紙銭と線香を受け取る人、供物の食品つまり御飯と肉と魚を入れる桶を担いだ人が三人、そして太鼓と銅鑼と三神、また打ち上げ花火を上げる人など十数人が続いてやってくる。主人や家人は皆で線香を点し、爆竹を鳴らして門まで迎えに出る。打ち上げ花火が三回鳴らされる。紙銭を受け取る人と桶を持つ人が家の中に入る。太鼓や銅鑼を打つ饅頭班が門口に立ち、この家が祝福されるように祝言を述べる。家人は「これも饅頭のお陰です」と答える。太鼓と銅鑼が家に入り、祭壇の脇に並ぶ。ドンドン、ジャンジャン、そしてピューという口笛。饅頭班と同じように、饅頭、開山、大神が現れ、鬼やらいが行われる。最後に三神がそれぞれ「人が榮え、財を成すように」「家々に吉祥、戸々に安全」「男に百の福、女に千の吉祥」などと祝言を述べる。家人は「饅頭のお陰です」と答える。普通の家はここまで終わりとなるが、村の中で五軒の家だけは、家中の部屋という部屋全部の鬼やらいが行われる。これを「捜間」と称する。

祭壇前での鬼やらいが済むと、開山と大神が松明を先頭に、家の祭壇に向かって右手の部屋から一部屋ずつ回って、左手の部屋から出てくる。部屋の入口に鎖を打ち付け、右足を出し、左足をそれにつけるようにする足運びで、やや上体をかがめ、時々足を踏み、部屋の中の悪いものを脅かし、追い出そうとする。再び悪いものが侵入しないように鬼やらいの済んだ部屋は戸を堅く閉める。饅頭は印を結んだ手を揺すり続ける。太鼓はゆっくりドンドンと打ち鳴らされる。最後に祭壇の部屋に戻り、仮面を上げ、顔を出し、楽隊とともに、この家の平安や五穀豊饒などを祈る祝言を大声で唱えてから、門口を出て、次の家へと回る。主人は爆竹を鳴らして送り、この時初めて部屋の戸を開けても良い。

五軒とは、呉太尹公、曹而正、呉武林、呉江、黄長福の家である。清代の文献『石郵郷饅頭記』から推察すると、全戸でこのような捜間が行われていたようだが、時を経て戸数が増し、特別ないきさつを持つ五軒のみで行われるだけとなった。捜間をする家に加えられるには、頭人の許可はもちろん神の意志を尋ねなくてはならないという。

捜間の間、休憩のためにあんの入った饅頭やら白湯を出す家も決められている。そのような時、饅頭の面は祭壇向かって右の柱に、開山、大神の面は左の柱に掛けら

れる。難班と手伝いの人々は決められた卓につき、饅頭などを頂くが、必ず盆の四隅に一ずつ残さなくてはならない。

家々では、夜を徹して寝ずに、子供も大人も三神の訪れを待つ。十六日の月明りが東から西へと傾く午前三時頃まで祭りは止まない。

(4) 圓難

第四段の圓難は、全村百八十九軒の祭壇を回り終わり、難班が凄い勢いで難神廟に掛け戻ってから始まる。神に礼拝して、難班のために一日から十六日まで食事を供した家の戸主の名を読み上げ、一人一人の運勢を占う。

「○月○日△△(人名) 公供飯、盖保、公下子孫、合家吉慶、財源茂盛、求願中禱告」と述べた後、占いに陰陽の卦が出ると、神に真心が通じたとされる。陰陽と出なかった場合、神に対する真心が足りなかったとされ、「若有心三口四、求願中禱告」と述べ、もう一度占う。

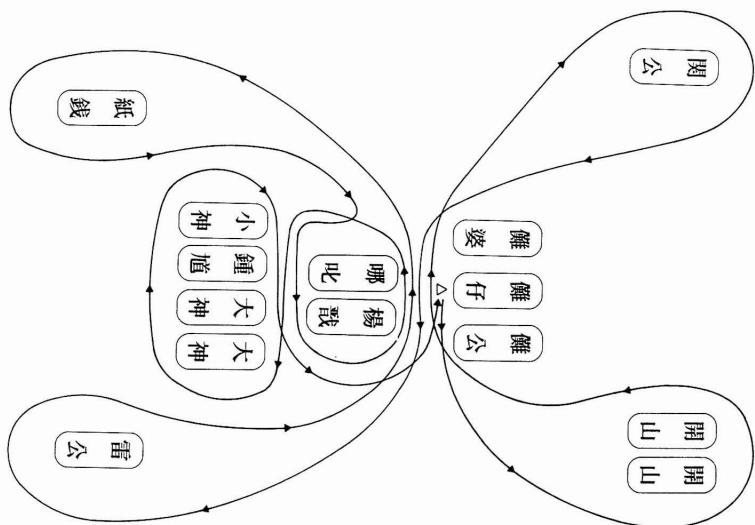
廟に置いてあった難仔の人形と全ての面を下ろし、箱に詰め、村の南側を流れる川の河原に向かう。この儀礼に女が参加することは固く禁じられている。松明も灯さず、月明かりだけを頼りに真っ暗闇の中、風水先生に見てもらっておいいた方位に、まず難仔を置き、その左右に

難公、難婆の面と杖と扇子を配し、それを中心に八卦の形のようにそれぞれの面ととりものを置く。そして、松明を持った大伯の後に七人が続き、面の周囲をぐるぐる回る。順路は図を参照のこと。

松明を消して、素早く難仔と全ての面を箱に収める。太鼓を裏返しにして、その中で今年の穀物の出来具合、家畜の育ち具合、子供の授かり具合、病気の治り具合を占う。この時「一粒の米から万粒採れる」「家畜は増える」「子を求める者には、子宝が授かるように」「麻疹の女神様、病気がすぐに治りますように」と唱えて占う。陰陽と出るまで、穀物と子授かりと病気は二回占い、家畜は三回占った結果、大伯が「今年は穀物と子授かり、病気の状況は良と出た。家畜は不良と出た」と言った。家々からお礼として集められた紙銭を燃やし線香を点す。廟に戻ると、門が閉ざされており、そこで松明を灯しながら「参聖像回殿詩」を唱える。廟内の人が「よろしい」と答えて、爆竹を鳴らし、門が開く。門内に入ると神に礼をして、箱を下ろす。

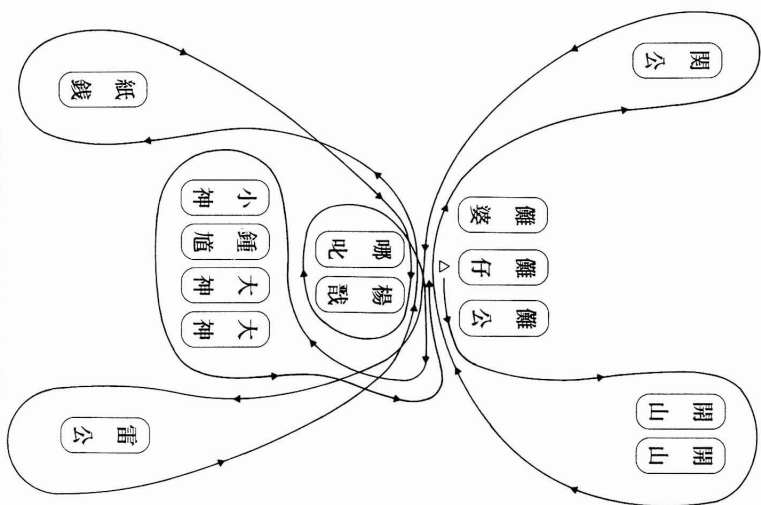
七、八伯が家々から集めた供物から一杯の御飯と一切の肉と、一尾の魚を桶に入れる。廟の南西の方向に持って行き、紙銭を燃やし、空に向かって桶の中の供物を撒き、歴代の難班の霊に捧げる。この際、「難班の先達、まだお会いしたことのない大伯達、また彭潤子、劉加龍、

2 回 目



(2)

1 回 目



圓盤で河原に面を配し、その回りをめぐる順路

(1)

李長仙人、黄任伎大伯、李長雲、趙長孫師兄」と歴代の
雛班達の名を呼ぶ。紙銭を燃やし、三回礼をして雛神廟
に戻る。

家々から頂いた御飯と肉と魚で、雛班の八人のほか、
供物の桶を担いだ人、松明を持った人、打ち上げ花火を
扱った人、紙銭を集めた人、そして頭人等祭りに協力し
た人々で直会を行う。これを「雛飯を食べる」と称する。

朝十時頃、雛班が頭人達を招いて、供物でお礼の御馳
走をする。ここで今年の雛班について頭人達の批評が加
えられる。また、残った供物は、村内の食事を提供して
くれた家々に少しずつ返す。これを「回飯」と称する。
四伯は菓子を持ち、五伯は肉の桶、六伯は御飯の桶を持
ち、七、八伯が家々に一碗の御飯と二かけの肉を返して
回る。

家々では、「神の御飯を食べれば、頭が万丈にも高く
なります」と答え、また菓子などを返す。

十八日には、他村に七、八伯が赴き、お返しをする。
一人は上路、一人は下路を受け持つ。

祭りの最後に面などの片付けがされる。これは風水先
生に選んでもらった日に行われ、正月の二十日前後に当
たる。雛神廟で雛班達は礼を行い、七伯、八伯が湯を沸
かし、面をよく拭いて乾かす。使った用具も洗って乾か
す。大伯、二伯、三伯は手を出さず、頭人が監督する。

線香とろうそくを点し、門を閉じ、三伯、四伯、五伯、
六伯のうち二人が神像の上の屋根裏の大きな竹製の箱に、
面をしまう。下の段に、二つの開山、雛公雛婆を置き、
紙を挟みながら、その上に哪叱、楊戩、紙銭を重ね、そ
のまた上に二つの大神、小神を載せる。最後に雛仔と小
道具を入れ、蓋を閉める。その後、廟門を開ける。これ
で祭りの全段が終了する。

六、演目と仮面

最後に跳雛で演じられる演目の内容と仮面に表現され
た神々について簡単に記す。それぞれの演目は、神々が
現われ、ストーリーのはっきりしない単純な動作で構成
される寸劇である。

△開山▽

開山神の仮面を着け、手に斧を持って前後左右に跳ね
回る。最初に家を訪れ、その場の悪疫を退散させる役柄
という。

開山は搜雛にも登場するが、黒地に金色の目の黒目を
半円にくりぬき、金の大きな鼻と火炎の眉、赤い口に二
本の牙、額に丸い鏡を付け、頭に二本の角を生やした恐
ろしい風貌をしている。

△紙銭▽

赤い糸の両端に、紙の銭を赤布に包んでつけたものを

持つて舞うので、この名がある。天を仰ぎ地を俯瞰する所作を行う。紂王の息子の殷元師とする説もあるようだが、この神の素性ははっきりしない。

紙銭面は茶の地に金色の目の黒目と目の縁をくり抜き、大きな鼻と火炎の眉、口には牙を持ち、耳は大きく二本の白い角を生やす。

△雷公▽

手に斧を持ち、舞い踊り、雷神が悪鬼を退散させることを表すという。もちろん雨を司る神の登場は農耕の順調なことを予祝する意味も加味されているに違いない。

雷公面は、緑の地に金色の目の黒目と目の脇をくり抜き、大きな鼻と金色の火炎の眉、額に第三の目の黒目をくり抜き、縦に金色の線を入れる。口は鳥の嘴のように尖り、耳は大きく尖り、二本の白い角を生やす。

△難公・難婆▽

特に情緒溢れる演目で、柔和な翁と媼の仮面を付け、杖と扇子を持つ。太鼓とドラに合わせ、ゆっくりとした動きで、祭壇から下ろした難仔を抱き、子を褒める仕種やおしっこをさせる所作をする。また、老人たちは、接吻したり、翁が媼の髪をとかしたりなどする。

難公の面は、白地にはっそりした黒い目をくり抜き、口は笑ったように右上がりに開け、歯が見える。口の回りには白い髭が埋め込まれている。額にはしわが彫り込

まれ、柔和な風貌をしている。

難婆の面は、白地に微笑んだ目は山形にはっそりと黒い目をくり抜き、口は笑ったように右上に彫られ、両脇に穴を開ける。眉毛は細く、優しい表情をしている。

△酔酒・酒壺仔▽

鍾馗と大神、小神によって、酒が汲み交わされ、酔っ払い、戯れ合う。この間、大神は周囲で見ている子供達に酒を与えようとするが、この酒を口にすると無病息災であるという。

大神面は、青地に金色の目の黒目をくりぬき、金の大きな鼻と火炎の眉、赤い口に二本の牙、額に人面の付いた金輪をはめ、頭に二本の角を生やした、日本の鬼を思わせる風貌である。

小神の面は、大神と同様と言えるが、ただ火炎の眉と眉の間に金色の丸が小神にはない点で異なる。

鍾馗面は、黒の地に金色の目の黒目を半円にくり抜き、金の大きな鼻と逆への字の眉、きゅっと結んだ赤い口、怖い官吏の風貌をしている。

△跳鏡▽

椅子を挟んで、鍾馗と小鬼の戯れが演じられる。

△雙伯郎▽

雙伯郎は、一郎が哪叱で、二郎は楊戩であるとされる。二人で大刀をふるって勇ましく対戦する。

哪叱・楊戩神の面は、二面とも白地に金色の目の黒目を小さく丸くくり抜き、赤い口はきりりと結ぶ。眉はまっすぐにきりりと黒で描かれる。ただ楊戩には額に縦目ほどこしてある点で異なる。

△関公祭刀▽

武勇を誇る関羽が、大刀を振りかざして武芸を披露する。

関羽の面は、赤い地に黒目を小さくくり抜き、きりりとした尖った黒い眉、大きな鼻、口と顎には黒い髪を埋め込み、頭には冠を着ける。

現在使用しているこれらの面は、一九八七年の火災以後、昔の形状そのままに新しく彫り直されたものである。

七、終わりに

結論として、石郵村の追儺行事は祝福的性格と除災的性格の二つの性格を合わせ持つと言える。前半の跳儺では、年のはじめに家々を神々が訪れ、めでたいことを述べて祝福する。後半の搜儺では、恐ろしい風貌の神々が訪れ、その強大な力で災いや汚れ、悪霊を追ひ払う。人々は年のはじめに新しい年の順調な生活を神に願う。神は直接、人の前に姿を現して、祝福を与え、また、順調な生活を脅かそうとするものをはらい清めてくれるのである。

神を招き寄せ、仮面を被る人は神になる。神はこの世に現われることで、その場の人々の心を同じくする効果を与える。神の所作を現実表現することは、神を喜ばせる意味もある。

神を演じる者達は決して社会的に高い地位に置かれていない。この祭りを支える頭人会という血縁集団組織と演者の儺班組織との関係は、まるで主従の関係を思わせる。呉姓の大姓としての権威がしのばれる。一方、本来、呉姓繁栄を約束する祭りであることが想像される。そして、祭りの参加者全員で直会をし、神と共に食することで、祭りに参加した者達は団結感を強める。当然、キリスト教の信者である場合など、この祭りには参加しない。しかし、参加する家との間での軋轢は感じられない。また人々にとって一番関心がありながら、どうにも予測できぬ今年の穀物の出来具合、家畜、子授かり、病気について、占いによって神の意志を確かめることは、この祭りの大きな目的ともなっている。こうした年占いを含めた圓儺で行われる儀礼からは、この祭りの伝承の古さが伺える。

大神、開山、鍾馗の恐ろしい風貌は、日本の鬼に共通し、強い力を有した鬼の本来の姿がしのばれる。これは古代の方相氏とも通じ、恐ろしい風貌故に、悪霊を退散させる力があるとされるのである。

中国の祭りの特徴の一つとして、爆竹や打ち上げ花火といった音によってその場が清められる点が挙げられる。音でおどかして悪霊を退散させるのである。

また、祭りの中で雛班は、村内のあちこちに設けられた坊で礼拝を行うが、この村を区切る境となる場所はそれぞれの名に示されるような様々な故事を伝えている。坊の名には過去から現在まで村で起こった様々な出来事が刻まれ、信仰の対象となっている点で興味深い。

江西省の追雛行事は様々なことを語ってくれる貴重な民俗であり、今後調査を重ね、引き続き考察を加えていきたいと考える。

注 (1) 地図上に搜雛と跳雛の順路を番号で記した。

これは雛班の葉根明氏に同行してもらい実際に一軒一軒歩きながら確認して付したものだが、搜雛の番号のない家があるのでこの点について今後の調査で修正を加えなくてはならないと考える。



跳儺
『醉酒・酒壺仔』
小神と大神が酒を酌み交わす場面



跳儺
『儺公・儺婆』
儺仔におしっこをさせる場面



搜儺
儺神廟での鬼やらい
ローソクに火をともし



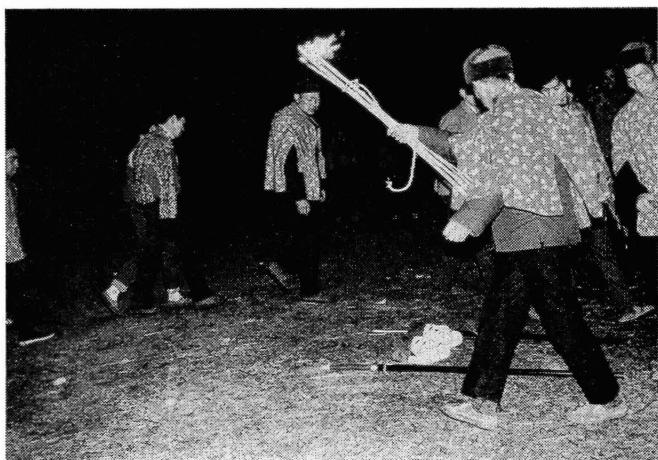
搜儺
大神が印を結び首を振って
鬼やらいをする



搜雛
一部屋ずつ鬼やらいを行う



搜雛
家々での鬼やらい
大神と鍾馗と開山



圓雛
河原に面を八卦の形に配し、
そのまわりをめぐる。